1週間、陸貝たちを飼ってみた

陸貝の飼い方 編

作・べっやくれい

陸貝を愛でる秘訣

陸にいる貝の仲間

日本に暮らす「陸貝」の中から４種を選んで殻を並べてみた（図1）。模様がちょっと違うかな、と思った方は筋がいい。まったく同じように見えてしまうという方もご心配なく。初めはみんなそういうものだ。

さて、陸貝とは、海にいる貝の仲間が陸上に進出したもの。おなじみのカタツムリや嫌われ者のナメクジがそれである。カタツムリの殻の形は互いに似ているので、どれも同じように見えるかもしれない。どの殻も落ち着いた茶色っぽい色で、裏を返せば地味である。そう、日本の陸貝は茶色くて地味なのだ。

しかし、そんな日本の地味な陸貝が僕にはとても魅力的に思え、殻をコレクションしている。彼ら（雌雄同体なので彼女たちともいえる【122ページ】）の殻は実に日本的な色で、控えめで、どことなくかわいい。

さて、ここから、陸貝の愛で方にかかわる基本的な知識を３つ、ご紹介したい。１つめは貝を集める人々のこと、２つめは陸貝の貝殻のこと、そして３つめは国産陸貝の主な種類である。

貝を愛する者たち

陸貝の話をするためには、まず「貝屋」「陸貝屋」について説明しなくてはならない。「貝屋」とは、貝を売っているお店のことではなく、貝が好きな人、あるいは貝を研究している人のこと。「陸貝屋」とは、貝屋の中でも特に陸貝を好き好む人のことである。

貝屋と呼ばれる人々の場合、貝殻の美しさに魅せられて貝好きになった人が多いので、貝殻をコレクションする人がほとんど。コレクションすることに熱中するようになれば、さまざまな種類の貝、特に珍しい貝を手元に置いておきたくなるのは人情だろう。あまり採れない珍しい貝は「レア」「珍貝」「珍品」と呼ばれ、貝屋の羨望の的となっている。

図1：４つの殻はすべて違う種の日本産の「陸貝」である。

珍品ランク上位の貝を自分で採集したときの悦びは何物にも代えがたい。ただし、あまりにもマニアックな珍品は、その存在を知っている貝屋が少ないので採集されにくく、需要が少ないなどの理由から、貝屋同士の“市場”に出回ることも稀である。このため、そういった貝は自分で採るか、貝屋同士の信頼で成り立つ“貝トレード”によって譲り受けるしかない。

一方、ふつうに採れる貝は「普通種」と呼ばれ、貝屋の扱いが変わってくる。貝屋のコレクション棚では、珍品は１つひとつ丁寧に梱包されて割れないように配慮されているのだが、普通種の標本は案外適当にしまわれていることも少なくない。多産でどこにでもあるような普通種は「雑貝」「駄貝」「（死殻を）踏んで歩く貝」とレッテルを貼られるのだ。

左巻きと右巻きの見分け方

陸貝の殻は渦巻き状に成長する。卵から生まれた陸貝の稚貝（子供）が、殻をらせん状に成長させて、性成熟した「成貝」になる。このため、稚貝のときの殻は、成貝の殻のてっぺんにあたる。

巻貝を見たときに、それが右巻きか、左巻きかを気にして生きている人は、読者はいるだろうか。実は、貝も陸貝も、その殻には右巻きと左巻きがある、と聞いたら、これから先がちょっとだけ気になるのではないだろうか。そんな未来の悩めるあなたに、貝殻の右巻き・左巻きの見分け方を３つ伝授したい。

①陸貝を上から見て、時計回りに巻いて成長するのが右巻きで、その逆が左巻き

②殻口と正面に向き合って、右に口があるのが右巻きで、その逆が左巻き

③陸貝を上から見て、親指を上に握りこぶしをつくり、右手人差し指と同じ巻きなら右巻き、左手と同じな

オオケマイマイ

Aegista vulgivaga　ナンバンマイマイ科オオベソマイマイ属　　殻径：約3cm

山のガレ場を無防備に転がっていた。この個体はややコケが生えて緑がかっている。岐阜県産。

どこにでもいる、謎の毛をもつ貝

岐阜県の山中で採れた毛並みの整った個体。貝殻の巻きがややほどけている。

日本には、殻に毛の生えた陸貝が何種かいる。その中で東日本から中・四国地方まで分布し、一番目にする機会が多いのが、このオオケマイマイだ。

オオケマイマイはリター層（落ち葉などが堆積した層）の中や石の裏などに隠れている。いろいろな環境にいる貝で、人家に近いやや乾燥気味の石垣の隙間から、山奥の沢沿いの霧深いガレ場（岩石がごろごろしている場所）やコケの上まで、同じ種なのにこうも生息環境が違う場所にいるのかと驚かされる。一般的に陸貝は、単一の種はどの個体も特定の環境で生きているものだが……（例えば、ある種は乾いたところにいるとか、別の種はもう少し湿ったところにいるとか）。

扁平な殻は、落葉の下にもぐったり、石の間に隠れたりするのに都合がいいのだろう。一方、この貝に生えた毛はゴミをつけてカモフラージュするためとか、襲ってくる敵に対して自分の体をより大きく見せるためとか、いろいろ理由が考えられているが、はっきりしていない。この毛は、人の髪とは違って毛根がない。殻表面のたんぱく質である殻皮の一部が少し伸びたものが、あたかも毛のように見えているのだ。生え変わることはなく、何かに擦れると毛が取れて、そこから二度と生えることはない。老成した貝は石に擦ったり、リター層の中を進む間に落ち葉に擦ったりして、ほぼ必ず毛は落ちて剥げてしまう。

見てのとおり殻の巻き数が多いので、肉を取り出すのが難しく、肉抜きがなかなか大変だ。軟体部はとても細長く、寄生虫調査で解剖して腎臓を調べるときに、それがとても長いのを実感する。

山の中で、沢の近くの斜面にいた若い個体。日輪のような毛が生えているが、何のためについているのかわかっていない。茨城県産（提供：池澤広美氏）。

ナミギセル

Stereophaedusa japonica　キセルガイ科オキナワギセル属　　殻高：約2.5cm

雨の日に、東京都内の公園で活動するナミギセル。都内でもそこそこ自然の残った場所であれば、このように本種を見つけることができるのだ。

リターを探すとコロンと見つかることがある。これは本種の死殻。

かなり大きいので見逃すことがない。朽木の表面にいた個体。

首都圏の公園で出会える大型キセルガイ

本州～九州北部に分布し、これらの地域でふつうに見られるキセルガイの1つ。殻の形はやや長いこん棒型。若い殻には艶があるが、老成すると艶の素である殻皮が剥げて白くなる。殻表面には肋と呼ばれる凸凹がある。

本種の殻の形は、地域によって若干の違いがある。関東地方で見られるナミギセルは殻長、肋などがベーシックなタイプ。新潟県の上越などで見られるナミギセルは、エチゴギセルと呼ばれていた。これは殻表面の肋が厚くて荒々しく、ナミギセルの中で一番カッコいい。写真の標本は、土の中でヒタチマイマイと一緒に集団冬眠していたものだ。山口県や九州地方北部で見られるものは殻が短く、全体的にずんぐりしている。これはオボロナミギセルと呼ばれていた。写真の個体は、大分県で集団冬眠していたものを掘り起こしたもの。陸貝採集では、寝込みを襲うことが多いのだ。

関東地方の都市部で見つかる大型のキセルガイはまず本種とみて間違いない。晴れた日は、リター層や朽木の下に隠れていることが多いが、湿度の高い日には石の上や木の幹の低いところを這っているのを観察できる。

新潟県で採れたエチゴギセル。下の２つと比べて、殻表面の縦肋がはっきりしているのがわかるだろう。殻高3cmと他のものより大型だ。

スタンダードな形をしている、千葉県のナミギセル（殻高2.5cm）。

オボロナミギセルと呼ばれていた、少しふっくらして小ぶりの貝（殻高2cm）。

ナメクジ

Meghimatium bilineatum　ナメクジ科ナメクジ属　　体長：約5cm

日本では広域で見られる。この写真は国道の歩道脇の石壁を這っていた個体。体色にはバリエーションがあり、このように茶色っぽい個体もいる。京都府にて。

雨の日になると木に登る個体をよく見かける。宮城県にて。

こちらも宮城県の個体。なぜ木に登ってくるのかははっきりしていない。

「ナメクジ」という名のナメクジ

ナマズというナマズの仲間がいるように、ナメクジという名前のナメクジの仲間がいる（ややこしいので、文献によってはフツウナメクジ、フタスジナメクジなどと呼ばれているが、本書ではナメクジとしたい）。

日本ではチャコウラナメクジに次いでメジャーなナメクジで、背中に甲羅（こうら）はなく、全体が灰色ののっぺりとした皮膚におおわれる。たまに茶色い個体もいて、ヤマナメクジとよく混同されるが、慣れてくると雰囲気が違うので多分わかる。夜になるとわらわら出てきて、木に登る個体がよく観察される。

ナメクジにはナメクジカンセンチュウ属の線虫（せんちゅう）が感染することが知られており、少なくとも京都府から茨城県までの本州太平洋側に局所的に分布することが知られている。この属には宿主（しゅくしゅ）のナメクジを殺してしまう種類がいるが、日本に分布する線虫が実際にナメクジを殺すかは、まだわかっていない。この仲間の線虫は、ヨーロッパでは生物農薬（せいぶつのうやく）として実用化されて販売されている。日本のナメクジカンセンチュウも、生物農薬に活用できるのかもしれないが、生物を野外に散布するのは環境へのリスクがあるため、事前に細心の注意を払う必要がある。

日中は見かけなくても、夜になるとわらわら出てきて木に登る。普段は上手に隠れているのだ。茨城県で夜に撮影した写真。

木の上を這っている個体。個体より下の色が濃い部分は歩いた跡。茨城県にて。

ナメクジを捕まえるときは、割りばしを使うと取りやすい。長崎県の個体。

アフリカマイマイ

Achatina fulica　アフリカマイマイ科アフリカマイマイ属　　殻高：約10cm

畑や公園など、人の手がある程度入った場所に多い。山地ではあまり見かけない（提供：池澤広美氏）。

人の手で世界的に広がってしまった。ハワイの植え込みにて。

成貝の標本は見ごたえがある（提供：川名美佐男氏）。

日本最大のカタツムリは嫌われ者

人の手によって日本国内に持ち込まれたアフリカ産のカタツムリ。南西諸島や小笠原諸島などで定着した。本種は農作物を食い荒らすだけでなく、広東住血線虫の中間宿主なのでたいへん嫌われている。

乾燥に強く、一見、昼間に陸貝がいなさそうな沖縄の都市公園でも、夜になって温度が下がるとたくさんのアフリカマイマイがわらわらと出てくる。高いところも好きなようで、夜や湿度の高い日中にはコンクリート壁や木に登っているのをよく見かける。

世界的には、ハワイ、ベトナムなどの熱帯地域に広く侵入しており、「世界の侵略的外来生物ワースト100」の1つに選定されている。その一方で、原産地のアフリカでは市場などで販売・消費されているほか、一部地域では本種の肉が食用缶詰として販売されている。

殻だけ見れば、日本のカタツムリにはない重みがあって、けっこうカッコいい。科レベルでは、日本のオカチョウジガイ類（下図）と同じグループだが、その目で本種の殻を見てみると、殻口が厚くならないこと、殻全体のシルエットなど、オカチョウジガイ類との共通点が見えてくる。

夜の公園に這い出てきた幼い貝。日が落ちて涼しくなるとどんどん出てくる。沖縄本島にて（提供：池澤広美氏）。

夜、公園を散歩していたときに出会った個体。沖縄本島にて。

オカチョウジガイ類のシリブトオカチョウジ。殻高1cm弱だが成貝。久米島産。

アオミオカタニシ

Leptopoma nitidum　ヤマタニシ科アオミオカタニシ属　　殻径：約1.5cm

目は触角の根元についている。黒い点がそれである（提供：小松崎茂氏）。

緑の肉を取り除いた標本。殻は白色で透けている。沖縄本島産。

いるところにはいる。ヘゴの葉っぱから採った個体。沖縄本島にて。

日本唯一、“緑色の陸貝”の殻は透明

世界には殻が緑の陸貝が何種もいる。とてもきれいでコレクターにも人気の貝だけど、日本には緑色の殻をもつ陸貝はいない。本種は、日本唯一の緑色の陸貝だが、これは殻の中の軟体部の色が透けて見えているからだ。このため、本種を茹でて肉抜きすると白く透ける殻が残る。

本種は木の葉に乗るなどして生活する樹上性の種であり、緑の体色は外敵から身を守るためのカモフラージュになると考えられている。15年くらい前には、沖縄本島をはじめとした沖縄県の離島に分布しており、公園やちょっとした雑木林でそこそこの個体数が見られたが、最近はめっきり減ったようだ。かつては奄美群島にもいたのだが、そこでの個体群は残念ながら絶滅したとされている。

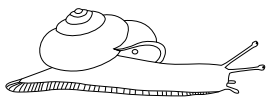
本種はヤマタニシ科に属しており、この仲間に共通の特徴となる円盤状のフタをもつ。一般的に、フタのある貝を標本にする際には、フタを殻と一緒に保管するのがセオリーだ。まず化繊綿を殻口につめ、その化繊綿とフタを糊で軽く貼りつける。こうすることで、生時にフタがついていた様子を標本で再現できる。

パステル調の色がとてもきれいだ。樹上性で、クワズイモやヘゴの葉っぱによくついている（提供：小松崎茂氏）。

触角は長く伸びるが、軟体部の胴体はあまり伸びない（提供：小松崎茂氏）。

日本以外に台湾などにも分布している（提供：小松崎茂氏）。

陸貝を探しに行こう!



陸貝採集は一年中できる

とかく6月の梅雨の時期によく採れると思われがちな陸貝だが、実際は違う。雨が降ると普段隠れている陸貝（特に大きなでんでんむしタイプ）が自分から出てきて人目につくからそう思われるのであって、陸貝採集にシーズンはなく、春夏秋冬、年中いつでも探しに行ける。

家電と同じで、欲しくなったときが行きどき。自分に合ったカタツムリライフはいつでも始められるし楽しめる。ただし採集に許可がいる場所もあるので要注意。

季節による探し方の違い

4月から10月ごろの暖かい時期であれば、雨の直後、あるいは翌日の湿り気が残っている午前中がいいだろう。

降雨のない日でも明け方から早朝にかけての涼しい時間帯に探せば、木の幹や地面を動き回る大きなでんでんむしを見つけることができる。晴れや曇りの日中には、積もった落ち葉の下、朽木の裏などに陸貝が隠れている。

寒い時期にはたくさんの個体が1か所に集まって冬眠する。冬眠場所となる落ち葉の中や、木の根元のやわらかい土の中を探すとよい。冬は蚊、スズメバチやマムシに出会う心配がないので安心感がある。

冬眠場所をうまく引き当てられたら、たくさんの陸貝を見つけることができる。種類によっては地中やガレ場の深いところに潜って冬眠するので、あらかじめ情報を集めておいたほうがいい。

雪が積もると地面がまったく見えなくなるので、落ち葉や朽木を探すことすらままならなくなる。冬に遠方採集を計画するときには、天気に注意しよう。

図1：自然公園内の雑木林はいいポイント。落ち葉の積もった場所、木の根元、低木の茂ったところなどを中心に探索してみよう。

図2：山奥であっても、沢の近くはいい採集ポイントだ。この写真の右側のような、樹木が生えて常に陰になっていて落ち葉が積もるような斜面は期待大だ。

陸貝採集のフィールド

下手に山奥の密林のような場所に行くと、かえって陸貝は採りにくい（山奥にいる種類もいるけど、個体数は少ないし探しにくい）。ある程度、人の手が加わった「雑木林」にこそけっこういるもので（図1）、昔から残されているような雑木林ならなおよい。

また、山の国道の途中にある駐車場と雑木林の境目、開けた登山道の両側にある雑木林など、環境が変わるところでも陸貝は採りやすい。

林や木立がある「自然公園・都市公園」は、都会からもアクセスしやすい好採集ポイント。オブジェや遊具だらけでも、雨あがりに出かけてみると、周りの木に陸貝が案外ついているものだ。

公園といっても、植えたての新しい街路樹しかなくて、地面がコンクリートでがちがちに固まっているような人工的すぎる場所や、芝生とグラウンドしかないような運動公園だと、さすがに無理かもしれないが。

玄人向きだが、山奥でも「川岸の少し開けた斜面」（図2）には常に湿り気があるせいか、陸貝が棲んでいることが多い。雨天時には、川の増水に注意すること。「海近くの風通しのよい林」もいいが、波しぶきを被るような場所はさすがにダメだったりする。

「竹林」では、大型のでんでんむしが竹の表面についていることがある。下草も低木も少ないので、見通しがよくて見つけやすい。堆積した竹の葉の下に小型の陸貝が隠れていることもある。

フィールドでどこを探すか

気軽に探すことのできるポイントの1つは「木の上」だ。針葉樹よりも広葉樹がいい。木の幹の表面についているものは、目につきやすくて

図3：同じ樹種でも、生えている場所が数メートル違うと陸貝のつき具合が違ってくる。これは海岸近くにある雑木林で、木の幹にミスジマイマイがついている様子。

図4：木にまとわりついたクズの葉っぱで休むヒダリマキマイマイ。すぐ下には本種の死殻がたくさん落ちていたので、この場所付近は本種のコロニーなのだろう。

探しやすい（図3）。

時間帯は雨の後や早朝がおすすめだが、昼間でも木の表面で殻に閉じこもって休んでいる個体を見つけることがある。種類によっては数メートル以上の高いところにいたりするので、長い棒が必要になることも。

葉につくこともあるので、いそうな木を見つけたらしばらく眺めてみよう。揺れる葉のすき間から、ちらりと陸貝が見えるはずだ（図4）。

実は、木によってついている・いないの差が激しい。ある木には30個体以上ついているけど、その隣の木には全然ついてない、ということも珍しくない。一度陸貝を見つけた木は、覚えておくといいだろう。

「石垣やコンクリート壁、側溝、電柱やガードレール」などの人工物は、表面が平たんなので、陸貝がついていれば殻がよく目立つ（図5）。たくさんのキセルガイが、雨あがりにわらわらとコンクリート壁を登ってくることもある（カルシウム供給源となるからだろう）。壁の雨水排水管の塩ビパイプにカタツムリが入っていることもある。ガードレールや看板に食痕がたくさん残っていたら（図6）、周りにもたくさんいるはずなのでよく探そう。

図5：苔生した石垣もいいポイントだ。石垣直下に積もった落ち葉の中も探すといい。石や葉っぱにゴマガイなどの微小貝がびっしりついていることもある。

図6：陸貝がガードレールのコケを食べた痕。食痕のサイズから陸貝の大きさを予測する。

じっくり探すポイント

「積もった落ち葉」（図7）を熊手で掘れば、小型のキセルガイなどの陸貝が出てくる。斜面と平たい地面の境目近くの、落ち葉と陸貝が積もっていそうな場所はかなりおすすめだ。かき分けるだけでなく、ふるいを使って落ち葉をふるえば、小さな陸貝がパラパラと砂にまじって落ちてくる。冬には大型のでんでんむしが集団冬眠していることも。あさった落ち葉はもとに戻しておくこと。

山に落ちている雑誌や段ボール、プラスチックなどの**「ゴミの裏」**にもけっこうついているものだ。新しいゴミではなく、しばらく放置されて汚れているようなものがいい（でも不法投棄はダメ、絶対）。金属やガラスを触ってケガをしないように、軍手をはめるなどして注意しよう。

「朽木」の中や下、石の下には、キセルガイやヤマナメクジなどの陸貝がよく隠れている。地面にめり込